のんた

26
山口の土地改良
vol.26
Nonta 2025

21世紀の食料・環境・ふるさとを考えよう！

◉巻頭特集
やまぐちの「農の偉業」探訪⑨
岩国市錦町向峠（むかたお）

山際を走る水路が村を育む
向峠神楽の弾ける夜に

入選作品のご紹介
第25回食料・環境・ふるさと 写真コンテスト

入選おめでとう!!
「ふるさとの田んぼと水」 子ども絵画展2023

「のんた」26年間を振り返って

食料・環境・ふるさとを考える
山口県地球人会議

◉巻頭特集

やまぐちの「農の偉業」探訪⑨

岩国市錦町向峠

山際を走る水路が 村を育む 向峠神楽の弾ける夜に

取材・文：石井里津子

集落の南東、小水力電力が行われている場所から小五郎山方面を見た光景。コスモスは向峠土地改良区の斉藤副理事長が植えたものだ

2024年10月26日、夜も8時半を過ぎると、黒い夜空に包まれた剱霊神社へ人影が集まってきた。灯された神楽殿の光に吸い寄せられるかのように、神楽奉納の時刻に合わせ、大人も子どもも暖かな服装をして鳥居をくぐって来る。

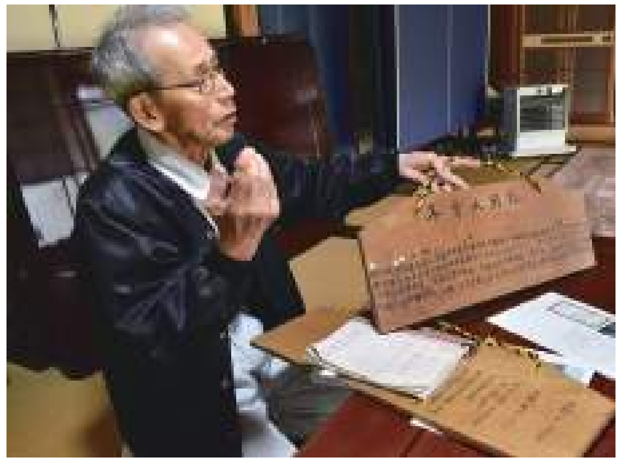
舞台の上下の袖や、パイプ椅子を3列に並べた観客席の周囲など、三方にいつしか人だかりができていた。

今回の物語は、山口県岩国市錦町向峠。旧錦町の中心部から約20㎞北上する。島根県境に位置し、現在、50戸弱の世帯が暮らす山あいの集落である。特筆したいのが、向峠で継承されている「向峠神楽」。島根県石見地方の「石見神楽」を取り入れてあり、ダイナミックな演出と華麗な舞いに定評がある。

向峠神楽は江戸時代末期、向峠水路の開削に感謝し、その歓びを神様へ届けようとはじまったという。今も、その歓びを弾けさせ、地域全体を包み込みながら神楽を奉納する夜がある。それが地元の氏神、剱霊神社の秋祭りの前夜だ。

水路や神楽が、どう地域をつなぎ、いかなる核であるのか——。今日はそんな話を見ていこう。向峠土地改良区理事長、安村勝利さんが、神楽奉納の前日と当日という多忙な時にもかかわらず、身体を張って向峠全体を案内してくれた。

集落の南端、北向きに位置する剱霊神社。文亀元（1501）年建立。「向峠の開拓の祟りを鎮めるため、平家伝来の宝剣を収めた」という。本殿の西側に神楽殿があり、神楽が奉納される



冬季水回札。水路の見回り用のノートが括りつけてある。写真人物が向峠土地改良区理事長、安村勝利さん（昭和19年生）

集落全戸で支える向峠水路

「毎日、水当番が水路の見回りをしちょるんです。全戸が水当番を務めます。水路を確認したら、この木の板と日誌を次の人に渡して行くんですよ」

挨拶もそこそこに、安村理事長から話を聞きはじめると、黄色いロープで持ち手をつけた、大きめの木製の板が出てきた。横幅は50㎝はあるだろうか。厚みは1㎝ほど。

横長の板には、横書きで大きく「冬季水回札」とあり、その下に縦書きで集落内の個人名がずらりと並んでいる。非農家も含め、全世帯主の名だという。全戸50名弱分。書かれてある順に右から左へ、水当番が回っていく。数名おきに土地改良区の役員9名がちゃんと入っている。

板の最後には、「此の札回は安政三年（一八五六）から区民によって続けられている命の見回です」という文言がある。水路が開かれてから約170年。その間、休むことなく続けられてきた営みだ。

「冬季水回札」には、B5の大学ノートが紐で括りつけてあった。見回り日誌である。なかを開くと「異状なし」「やや少なめ」「落石、落木多少あり」といった記述が目に入る。

高齢の人などは家のすぐ裏にある分水口を確認すれば良いなど、チェックポイントは、互いの状況を思いやって決められているという。ちなみに最高齢は96歳。高齢になっても地域の一員として、大事な役目を果たせる。

数日おきに組み込まれている役員は、取水口から末端まで幹線水路を確認する。夏場は、役員9人のみで順番を回し、水路全体の見回りを毎日行うという。

こうした170年近く続く水当番に対し、これまで反対の声は上がっていない。「水を忘れちゃいけんけ、（水当番制度は）ずっと続けていこう、って誰もが思ってるんじゃないかな」

毎年4月第1日曜日は「井手さらい」が行われる。2時間ほど全戸でスコップなどを持って水路掃除に汗を流す。7月第1日曜日は「井手刈り」。全戸が自前の鎌を手に集まる。驚いたことに草刈り機は使わないように伝えているという。

「草刈りしながら話をするのが目的ですけ。『できるだけ、鎌でやってくれ。ゆっくり草刈りしたらええけ。滅多にみんなで会わんのじゃけ』って言うんですよ」

その言葉に、はっとする。草刈り機が出すエンジン音に、黙々と単独でできる作業形態が脳裏に浮かんだ。が、鎌で手刈りをすれば、ともに作業に出た人との会話を楽しむ余裕ができる。効率化がもたらすコミュニケーション不足は、人間関係をこじらせることもあるだろう。向峠では、それを回避する手立てが水路管理のなかに組み込まれていた。

向峠は水のなかった平坦地

向かう峠と書いて「むかたお」と読む。江戸中期の史料「地下上申絵図」では「垰」と読む「向垰」の表記だが、現在は「峠」の字が当てられている。「峠」は、山道を登りつめ、下って行く場所を指す。一方「垰」の字が示すのは「連なった山の峰と峰のくぼんだ所」（＊1）である。

向峠の地形を眺めると、後者の印象が強い。山口県錦町から島根県へと抜けていく意味では「峠」なのだが、地形は山と山のあいだに広がった平坦地である。

向峠は、1162mの小五郎山の南麓の裾野、標高約400m前後に開かれている。集落の東を流れる宇佐川、西を流れる深谷川とも100mほど下の谷底を流れており、向峠水路ができるまでは川の水を利用できなかった。

水が乏しいのは「河川争奪」と呼ばれる自然現象によるもの。200～300万年前、1337mの寂地山からの水は、向峠を通り、深谷川と合流したのち、島根県のほうで高津川となって日本海へ流れ出ていた。向峠は、かつての川底にあたり、平地が形成されていたのである。

それが向峠の平地部を囲むように断層が生じ、深い谷が形成されていく。水の流れは、錦川へと移り、瀬戸内海へ向かうように。この変化が「河川争奪」と呼ばれる現象だ。こうして向峠は、平坦地が広がっているにもかかわらず、川は深い谷底を流れ、水のない台地となった。

長禄元（1457）年に開墾がはじまり、明応8（1499）年には、大々的に畑として開拓されている。とはいえ、米は取れず、決して豊かな村ではなかった。

天保7（1836）年の大飢饉で、餓死を含め約130人もが亡くなっている。この大惨事を機に、天保14（1843）年、水路開削の工事が着手された。約5km北上した深谷川上流の金山谷からの取水だ。集落の背後に聳える小五郎山の南麓の山腹に沿って水路を掘り進め、水を流し、たぐり寄せた。

13年かけて完成した向峠水路

向峠水路は、庄屋の山田利左エ門が村人を率い、13年もの年月を費やして安政3（1856）年に完成した。

北を上にして、鳥の目のように眺めれば、水路は小五郎山を縁取るように走り、平仮名の「し」の字を描くように流れている。「し」の字のように、水路の流れは、取水口から約4km南へ（下へ）下り、向峠集落に到達すると、東へ（右へ）と舵を切り、1.5kmほど弧を描く。そのカーブ部分の下側、つまり南側に、東西横長に広がる平地が、向峠の農地であり、集落である。

水が集落内を流れるあいだに、枡を設けた16箇所の分水口がある。幹線から流れてきた水は、櫛状に16本の支線へと落ちていく。こうして現在約46haの受益地の隅々まで水が行き届くのだ。

安村理事長の軽トラックに乗せてもらい、下流側から取水口まで2日間に渡って、案内してもらった。4号の分水口までは水路に沿って約3m幅の舗装道路が一本通っている。民家があり、消防ポンプ車が通れる幅が考慮されている。

水路の沿道は約3mの幅がある。消防のポンプ車が通れることを考えての道幅。水路沿いを散歩する89歳になるという散歩中の女性に出会う。ちなみに、分水口の6号と7号の距離は近く、50mほど

集落の西側では、対岸の島根県の集落が見える（写真右奥）。吉賀町初見新田、田野原。以前は、木製の簡易的な橋が深谷川にかけてあり、15分もあれば、歩いて行けたとのこと

ちょうど取水口から水が運ばれて4km地点辺りで、パイプラインのなかを水が流れているか確認できる箇所がある。下に発砲スチロールの浮きをつけた棒（箒の柄の再利用）を水路に浮かべてあり、この棒の目印の位置によって、パイプ内の水の深さが外からわかる仕組みだ。水の深さは15～19cmのところが良い。このアイデアも安村さんによるもの

岡足谷。「おくあしだに」とも呼ばれる。「奥」「悪し」「谷」が転じた可能性のある地名だ。水が勾配の強い岩肌を流れ、5段ほどの白い滝となって落ちていた。そこをまたいで水路を渡してある。樋の口や岡足谷あたりには、蝶のオオムラサキが棲息しているとか

取水口。「金山谷ダム」。川の向こうは島根県。測量で基点を定め、堰の高さや大きさを決めてあるが、昔から島根県側と話し合いがなされ、水の権利の合意があり、今もそれが変わらないという

現在、取水口から1号の分水口までは、パイプライン化され、それ以降は開水路だ。コンクリート板や網状の天板で覆う箇所を少しずつ増やしてきた。

「水路を見回るときはいつも4つの道具を持ってね。三角鍬、鎌、鉈、そしてチェーンソーね。倒木が道を塞いでいたり、水路に落ち葉が詰まっていたり……」

軽トラックの荷台には、これらが積み込んであった。三角鍬は、水路の落ち葉などをすくい上げるという。水路の見回りの「七つ道具」ならぬ「四つ道具」に、水路管理の大変さを垣間見た。

取水口「金山谷ダム（向峠頭首工）」と分水口1～16号

遠目から見ると、穏やかな田園風景が広がる向峠だが、水路を見るために、山の中腹へと足を運び、奥へ奥へと、上流に進んで行くにつれ、印象が変わっていく。木々が生い茂る森は深みを増し、聳える岩壁や、小さくとも鋭くえぐられた谷沢が幾つもある。落石する場所も多々あるという。

山肌にへばりつくように掘られた水路に、先人の執念のようなものすら感じる。険しい谷が幾つあろうが、なんとしても一本の水の道を下流へつなぐんだ、という強い意志が刻まれていた。

江戸時代の工事の苦労話も残っている。たとえば「樋の口」という谷は、硬い岩石のため、木管をつないで水路を渡そうとしたものの、水圧に耐えられずに破壊。そのため、干した芋のつるを岩の上で焼き、柔らかくすることで岩を掘り、難所を突破したという。

水路は、改修を重ねて現在に至る。大きな工事では、大正13（1924）年、全水路をコンクリートに変えている。昭和後半からは、いくつもの県営整備事業によって、修理や浄水場などが手がけられ、平成に入ってからは、上流部のパイプライン化が進んだ。

用水路からの導水で簡易水道が完成したのは、昭和62（1987）年。平成29（2017）年には、小水力発電も開始し、電力会社に売電するようになった。

最新の水路改修等は、平成26（2014）年にスタートした「中山間地域総合整備事業」によるもの。令和3（2021）年、ようやく事業を終えた。現場工事を担当して、地元目線で設計し、後世に続くよう采配を振ってきたのが、安村理事長だった。工事を請け負った地元業者勤めであり、現場監督という責務を担ったのである。この役割がドンピシャ。地元や向峠水路を知り尽くした人物である。かゆいところに手が届き、経費を抑えた無駄のない、現状に即した設計ができた。

だから、現代の向峠水路では徹頭徹尾、地元が利用しやすく管理しやすい設計にこだわってある。それは、江戸時代に創意工夫によって水路を掘り進めた気概を受け継いでいるようにも見えた。

小水力発電は、旧向峠小学校（現在、通信制の松陰高校）の東側にある10号分水口から最後、深谷川へと落ちる水で行われている。 月に2万5～7千円ほどを中国電力に売電している

向峠神楽と向峠神楽保存会

そして、向峠水路を語る際に忘れてはならないのが向峠神楽である。水路の開通を歓び、奉納されるようになったのだから。

向峠神楽は、水路完成に合わせ、安政年間（1855-1860）にはじまったという。芸州に縁を持つ青年に近隣に伝わる「山代神楽」を習得させ、地元の若者に教えたのがはじまりだ。

さらに大正初期には、石見神楽を取り入れた。豪華で艶やかな衣装や面などの費用のために「舞子頼母子講（たのもしこう）」を作って、継続させてきた。

向峠神楽保存会に所属しているのは、2024年度は18名。40歳代が中心だ。うち高校生が2名。高校1年生と2年生だ。2023年、2024年と続けて、1名ずつ入ってきた。

「毎週水曜の夜、4～5時間の練習をするから、高校生にならないと入れない。熱心だよ。そう。神楽は楽しいんだよね」

目を細めて語る安村理事長は、向峠神楽保存会の会長でもある。自身は、昭和47（1972）年に保存会に入ったというが、その頃はメンバーも減り、地域の奉納のみで辛うじてつながっていた。

それが今ではハワイ、台湾、韓国、イタリアといった海外公演の実績も持つ。県内外のイベントなどで得る公演料は、衣装や面をはじめ、小道具へと変わる。これらは、専門店に発注され、手仕事で作られているが、70万円、100万円……と高価な品々ばかりだ。

準備は自分たちの手で行う。天蓋の飾り付けも、弓矢や光輪といった小道具もその場で色紙を切り、糊で貼り付け作成する。破って登場する障子の貼り付け、絵柄描き……。手慣れた手仕事ぶりに目を見張る。取材した日も、夜の奉納に向け、午後から着々と準備が進んでいた。

人が育ち、コミュニティ力が育まれる

夜の剱霊神社にトントン、トンと、小気味よい締太鼓の音が響き渡った。柔らかな笛の音が辺りを包み込む。合わせ鉦に大太鼓。神楽殿の横では、たき火が橙色の火の粉を宙に散らしている。

神職とともに拝礼を行う神事のあと、神楽は、場を清める演目「潮祓（しおはらい）」ではじまった。二人組の舞人のうちひとりは、高校2年生。息のあった舞いで、清めの大役を担う。

続く演目「八幡（はちまん）」では、武勇の神を高校1年生が演じきる。若い二人とも見事に神楽のリズムや身体の使い方を身につけており、美しく、凛々しく、端正な舞いを披露する。深く腰を下げ、向峠の地をしかと踏む姿は頼もしかった。

奉納は、儀式的な演目からはじまり、徐々にエンターテインメント性を帯びてくる。向峠神楽の舞は、動きが激しい。片足を軸にくるりと回り続けるなど艶やかな衣装の動きもダイナミックだ。

複数の舞人の出る演目では、いわば自転と公転を組み合わせた円陣の舞いによって神楽殿に渦の風が巻き起こり、辺り一帯を熱気で包み込んでいく。

地域の子どもたちが、怖い面をつけたあやかしたちに連れ去られて、大泣き。裏に引っ込むとすぐに家族のもとへ

神楽殿の両袖には観客席がある。そこからの眺めはまた一風違っている

向峠神楽保存会の会長でもある安村理事長が、演目「大蛇」では、豪華な衣装に着替え、翁として登場。圧倒的な存在感を示していた

演目「大蛇」では、天井に届くほどの高さにもなる大蛇の口から花火が出たり、目が光ったり。スモークもたかれ、見応え十分。子どもたちは大蛇をやっつけん、とおもちゃの剣を構え、神話の世界に入り込む

「客席に飛び込んでいくよ。観ている人と一緒になって楽しむ神楽が向峠神楽」と安村理事長から聞いていたとおり、たとえば、演目「黒塚（くろづか）」では、妖婦（ようふ）となった狐（きつね）が、観客席に降りて駆け回り、小さな子どもを見つけると抱きかかえ、舞台へとさらっていく。怖い神楽面と向き合い、泣き叫ぶ子ども。そんなやりとりも会場を沸かせる。

また、ひょっとこ面といった滑稽役などの、舞人たちそれぞれの卓越した演技にも目が釘付けだった。

一方、舞台の前では、3歳ぐらいから小学校低学年あたりと覚しき小さな剣士たちが、おもちゃの剣や、少し大きな少年にその場で作ってもらったバルーンアートの剣を各々手にし、かぶりつきで怪物たちをやっつけようと身構えている。ちゃんと神楽に参加しているのだ。

最後の演目「大蛇（おろち）」では、舞台下から子どもたちも、須佐之男命（すさのおのみこと）とともに大蛇に剣を叩き付ける。小さな剣士たちも、必死で里人や村を守っている。

いつしか神楽の世界が拡張し、神様の笑いが村を包み込んでいた。9時からはじまった神楽も、あっという間に12時を超え、終了は真夜中の1時を回っていた。

向峠には神様とともに、自然を畏れ敬い、安心して笑える時間が流れていた。子どもたちはそれを体感し、のびやかに育つ。そんな豊かな成長を見守る先輩や大人たち。そんななかで、それぞれの役目を果たしていく。

水路、神楽、水路管理、人、歴史、山、神社……。向峠では、これらすべてが有機的につながっている。この有機的なつながりは、一朝一夕にはできるものではない。つながりの糸は、意識して紡がれてきたのだ。そして今も向峠では、人と人の確かなつながりが、雲が湧き立つように新たに生まれている。水路や向峠神楽という伝統を核にしつつ、アップデートし、さらにそれを包む込む寛容さと、しなやかさがあってこそである。

＊1：漢字辞典オンライン

【参考文献】

『錦町史』錦町史編さん委員会　昭和63年　錦町発行

『錦町史　民俗編　山と里と人と暮らし』錦町史編さん委員会編　平成7年　錦町発行

『山代地方の神楽』山口県教育庁文化財保護課編集　平成17年　山口県教育委員会発行

『むかたお』恵本洋嗣著　2005年　向峠澄川盛信宇兵衛道喜を考える会発行

「『むら・人・くらし』の聞き書き集～岩国市錦町」平成28年　山口県発行

「わたしたちのきょう土　にしき」錦町社会科副読本編集委員会　錦町教育委員会発行

「錦川　第六号（小五郎山と向峠台地の伝説について　恵本洋嗣）」錦川編集委員会編
平成5年　錦町教育委員会発行

須佐之男命が村を襲う大蛇を倒す八岐大蛇（やまたのおろち）の神話。6体の大蛇が神楽殿を暴れ回る。くるくると長い胴体を操り、生きもののよう

第25回 食料・環境「水・土・人・くらし」ふるさと写真コンテスト

一般の部

入賞入選作品のご紹介

山口県内の農山漁村の良さを再発見していただこうと「水・土・人・くらし」をテーマに、平成11年度から始まった『食料・環境・ふるさと写真コンテスト』。25回目を迎えた昨年度は、8月から12月にかけて募集を行ない、県下各地から農山漁村の風景や生き物、人々の営み、伝統文化などを撮った460点の作品の応募がありました。

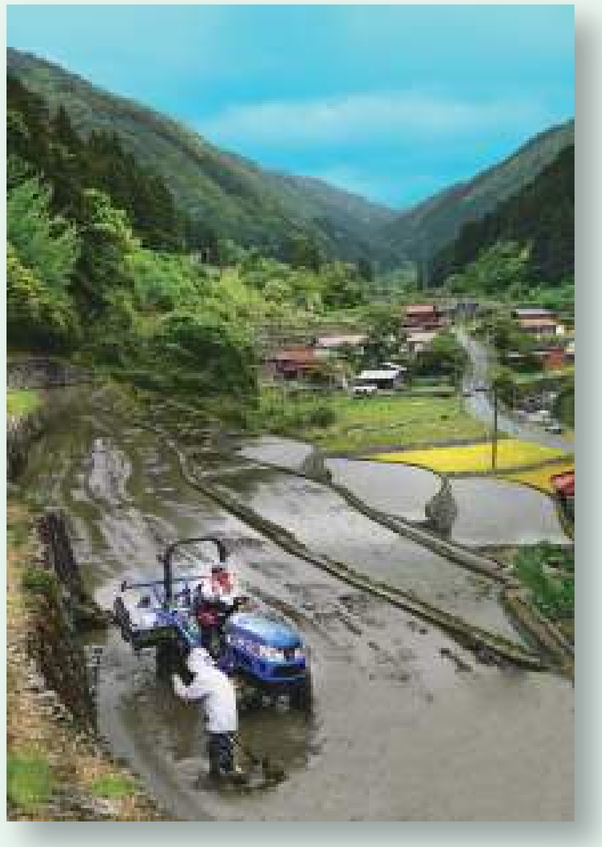
すばらしい自然や文化が数多く残る農山漁村は、まさに私たちの、そして生き物たちの心通うかけがえのないやすらぎの地、次世代に残していきたい宝です。入賞作品24点をご紹介します。

Prize 山口県知事賞

『玉ねぎ列車』 山口市秋穂二島

村田 利子（宇部市）

秋穂二島の玉ねぎ収穫の様子です。夢カレン列車と名付けておられました。

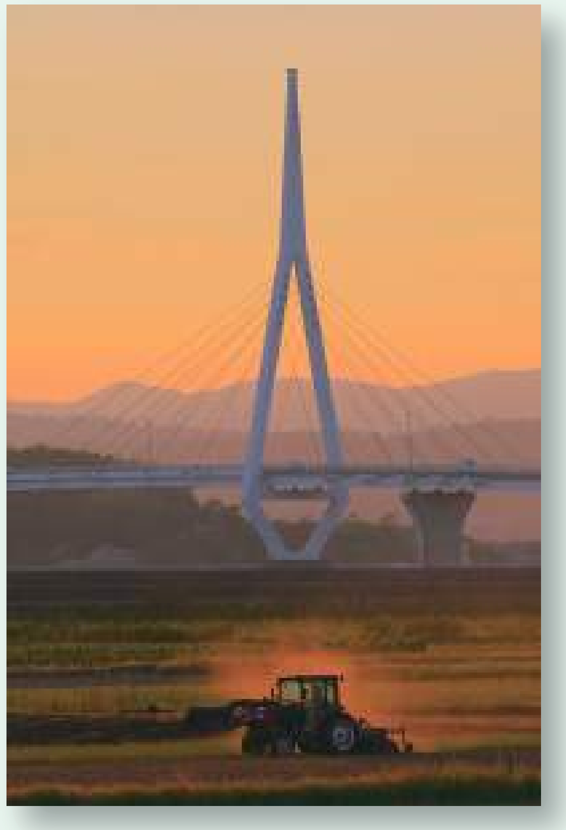


Prize 山口県地球人会議会長賞

『田起しに勤しむ』 山口市徳地三谷

金子 幸子（宇部市）

夫婦で昔ながらの田起しをしておられる様子に感動しました。



Prize 水土里ネット山口会長賞

『砂塵から始まる冬キャベツ』 山口市秋穂二島

齋藤 暁（山口市）

周防大橋のたもとで、忙しくトラクターが行き交い、上がる砂けむり…今年も冬キャベツの準備が始まった。

Prize 山口新聞社賞

『マルチング』 山陽小野田市埴生（花の海）

秦 保博（宇部市）

たまたま畝に黒いシートを被せる作業をされているところに遭遇し、「マルチング」と言う作業を知りました。シートが夕日に輝いて綺麗でした。

Prize 中国新聞防長本社賞

『おーい！』 宇部市藤河内茶園

守田 みなみ（周南市）

双子の息子と茶摘みに行きました。絶景に圧倒されつつ、「この葉っぱがおいしいお茶になるんだね」と楽しんでいました。

児童・生徒の部

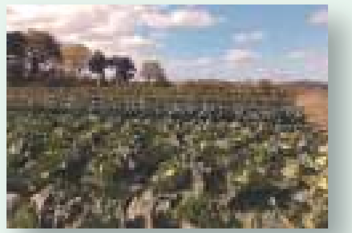
Prize 入　選

『じいじと畑のお手伝い』周南市
赤尾 百花（周南市・小学４年）

じいじが畑をするときはいつもお手伝いします。いつも泥だらけになってお手伝いをしています。

『待ってたよ〜』岩国市川西
岩﨑 葵衣（岩国市・小学４年）

電車がくる時間を調べて散歩に行きました。桜と桜の電車がとれました。

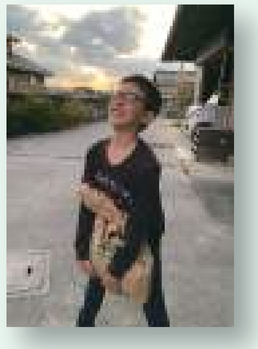


『青空とキャベツ畑』秋穂（祖父の畑）
柴田 佳希（山口市・小学６年）

おじいちゃん家のキャベツ畑と青空がすごくきれいだったのでとりました。

『自然』周防大島町
山本 華（周防大島町・中学１年）

神秘的だと思った。



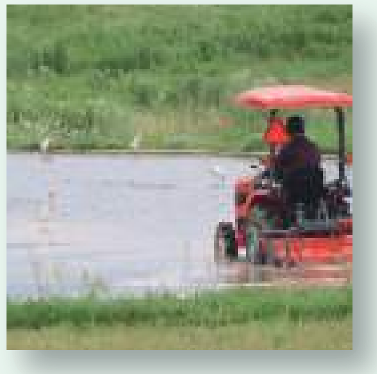
『米 10kg』自宅
山本 理久（柳井市・中学２年）

精米するため、お米を持ってきた弟。重いけど一生懸命に運ぶ表情が良かったので、撮影しました。

Prize 山口県地球人会議会長賞

『王喜の「亥の子」』家の庭
山根 朔（下関市・小学１年）

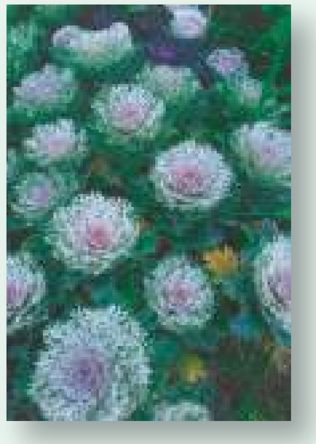
初めて「いのこ」が家に来たので、写真にとりました。とてもかっこよかったです。



Prize 優 秀 賞

『いっぱい食べるぞ〜』山口市鋳銭司
田中 大理（山口市・小学６年）

農家さんが田んぼを耕されていると、たくさんのアマサギが集まっていました。きっとドジョウなんかがいっぱいいるんだろうと思います。アマサギは、羽の色が綺麗で僕の好きな鳥です。



『ばあばの葉ボタン』ばあばの家の畑
藤村 美海（山口市・小学６年）

ふつうの葉ボタンとはちがってかわいかったからです。

『徳地にあるきれいな橋』徳地 やなぎ橋
渡邉 知憲（山口市・小学３年）

徳地にはきれいな橋があるのは知らなかったです。

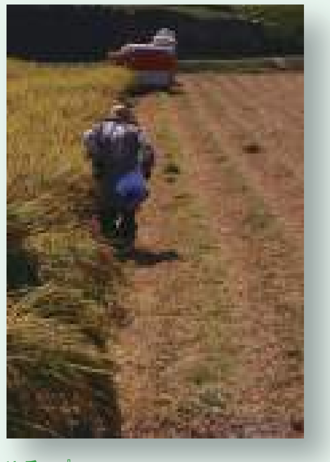
主　催／食料・環境・ふるさとを考える山口県地球人会議
　　　　山口県・水土里ネット山口
後　援／山口新聞社・中国新聞防長本社

※学年は受賞当時のものです。

一般の部 入選

『イカ干し』下関市豊北町粟野
中野 紀男（長門市）

下関市内であった日韓交流文化会からの帰路、イカ干しの方の姿。こころよく撮影を許可してくれた。



『落穂ひろい』周南市八代
山本 由里子（周南市）

60年も続けられた農業。せっかく作ったお米は大事にしたい、落穂ひろいは私の仕事といっておられました。

『希望』下関市豊田町
原 宏（下関市）

真白い山が見えたので行くと、桧木苗木がビニールさやに入っていた。森林にない森の栄養分が田に流れこみよい米がとれる。

『天日干し準備中』萩市浜崎
内山 省三（山口市）

萩市菊が浜の海岸沿いで撮影した写真です。「しらす」の天日干しを準備する光景で、重ねられる「すわく」に敷きつめられる「しらす」を少しスローシャッターで撮影しました。

『海辺に住む』長門市通
横川 光成（防府市）

何気ない港風景ですが、海辺いっぱいに並ぶ四角い建物が、夏の光をあびて異国情緒を感じさせているように見えました。

『伝馬船だよ!』周南市粭島
弘中 伸治（下松市）

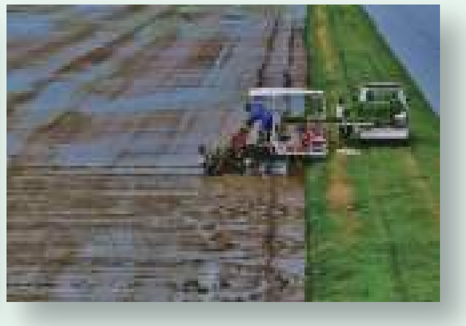
４年ぶりの開催となった貴船神社夏祭り。久しぶりの神事に心躍らせる親子。こうして伝承されることを嬉しく思いました。

『稲掛け』宇部市吉部
谷野 和恵（山陽小野田市）

親戚が集まって稲掛けをされていました。子供たちもお手伝いです。昔ながらに干したお米は大変おいしいです。

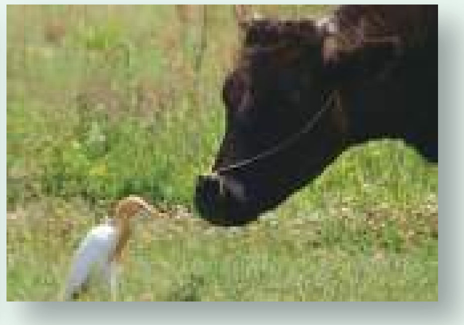
『お元気ですね!』大島町日良居
吉光 佑二（周南市）

農園で、超高齢のSさんですが、「お元気ですねぇ」「これから本格的に作業が始まるのよ、頑張らんにゃ」と笑顔で言われていました。



『田植え最盛期』防府市西浦
藤田 毅（防府市）

広大な干拓農地への田植えを、植える者と苗を運ぶものが協力しあって手際よく作業を行っている様子を撮りました。



『共に生きる』山口市阿知須
谷野 隆（山陽小野田市）

牧場で牛とサギが仲良くしている所です。自然に囲まれてのんびりした時間を過ごしリラックス出来ました。

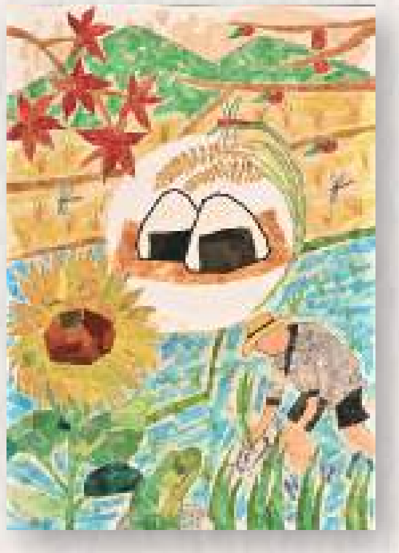
Congratulations!!

＼ 入賞おめでとう!! ／

「未来へつなごう！ふるさとの水土里」子ども絵画展2023

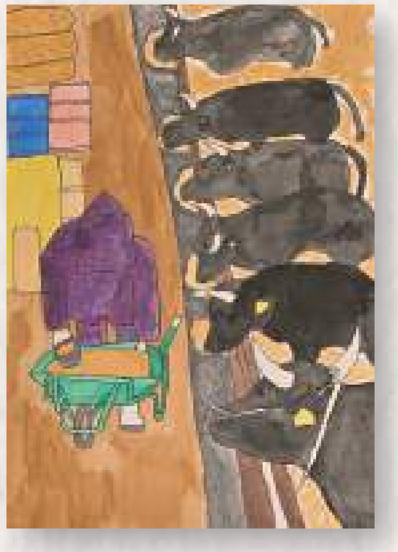
主催:全国水土里ネット・都道府県水土里ネット

水土里ネット（土地改良事業団体連合会）では、子どもたちに水の循環や環境保全への理解を促すことを目的として、毎年「未来へつなごう!ふるさとの水土里子ども絵画展」を開催しています。24回目を迎えた2023年には、農村や河川の自然の豊かさを描いた、たくさんの素晴らしい作品が全国から寄せられました。応募総数は3、021点で、山口県からは3名の方が入賞されました。おめでとうございます!!



恵みの三つの水賞
「お米に四季を感じて」
山口市立宮野小学校5年 清水 星汰さん

農林水産大臣賞
「ぼくもたべたいキラキラごはん」
山口市立宮野小学校1年 清水 星那さん



水土里ネット山口 会長賞
「牛とばあちゃん」
山口市立柚野木小学校6年 賀屋 蔵之佑さん

※学校名、学年は受賞当時のものです。

26年間を振り返って

本年、令和6年7月24日に開催した山口県地球人会議運営委員会において、山口県地球人会議の本年度末での解散が決定しました。

平成9年度からの全国的な潮流の中で平成11年に設立した山口県地球人会議では、広く県民の皆様に農業農村の役割を理解していただくための活動を今日まで様々行ってきました。設立の平成11年は奇しくも農政の憲法とされる「食料・農業・農村基本法」制定の年でした。

そして、この令和6年、「食料・農業・農村基本法」の改正法が成立し施行されました。本会議の目的でもある「多面的機能の維持発揮」は改正法に引き継がれ、「環境と調和のとれた食料システムの確立」は第三条に明記されました。この新たな基本法の施行を見届けた今、解散することとしました。

皆様に支えられた26年間を山口県地球人会議運営委員のみなさまとともに振り返ります。

会長 佐藤 登
元 山口大学教育学部教授

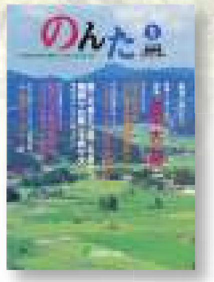
平成14年10月11・12日の両日、長門市油谷町文化会館で「全国『田んぼの学校』フォーラムinやまぐち」が開催されました。「田んぼの学校の自立的運営」「田んぼの学校と地域の活性化」「田んぼの学校と自然環境の保全」「全国田んぼの学校と山口県での取り組み」の4つの分科会があり、分科会で必要な資料作りに県内の田んぼの会員も集まり汗を流しました。開催までに幾度となく県土連から車で現地へ出発して行く事があり関係地域とのやりとりがこの様に必要なのだと理解しました。

現在山口県各地の田んぼの学校の多くは関係者の高齢化と共に休止している状態です。

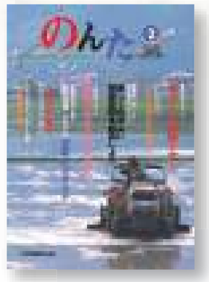
副会長 石井 里津子
ノンフィクションライター

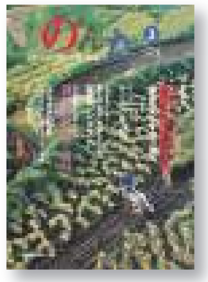
地球人会議って素敵な名称です。地球規模のまなざしで地域を考える――という慧眼と高い志を持った会議でした。当初、全国各地で立ち上がった会でしたが、26年、どこよりも長く継続させ、機能させてきた皆様に深い敬意を表します。今、メンバーの一人として共に幕を降ろさせていただくこと、深く感謝します。「のんた」の存在も、個人発信に任せ、農の普遍的価値を伝える役割から多くが手を引く昨今、「さすが山口県!」と唸らされてきました。これからもみんながそんな鼻高い気持ちであれますように。感謝を込めて。

26年を振り返って

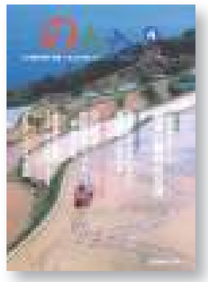


1999





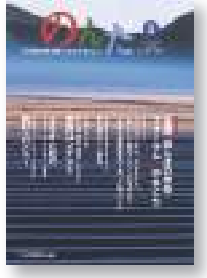
2000

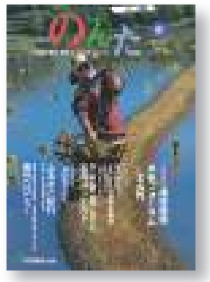


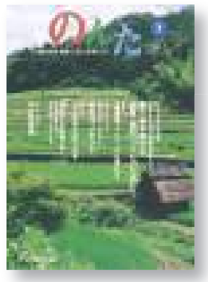
運営委員　**安渓 遊地**

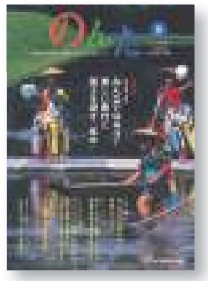
山口県立大学名誉教授

現役の教員時代は、大学生とキャンパスを飛び出して勉強しました。地球人会議の部会で訪ねた椹野川源流部の産廃処分場を福田百合子前会長がこわごわ覗いておられる写真を、長く環境問題の授業で使いました。これからも地域人こそ地球人という哲学とその実践の継続を応援していきます。

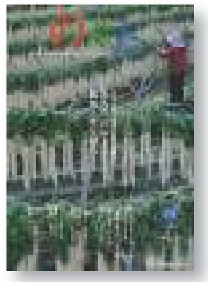


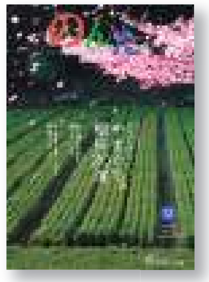






2005



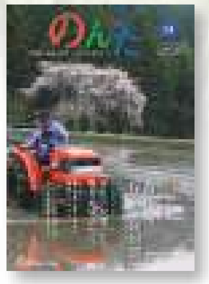


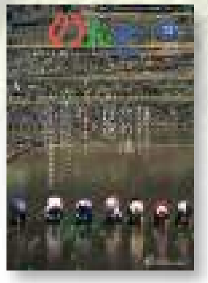
2010

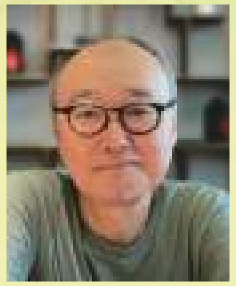
運営委員　**安渓 貴子**

元 山口大学・山口県立大学非常勤講師

里山・里海の豊かな山口の地域から学び・伝える。地球人会議に参加しつつ2012年からは山口市阿東で家族農業をしています。異常気象の中、いかに食と環境を安全においしく維持するか。タネを播いて育て食べて、そのタネを採り翌年につなげる面白さ、難しさ、学びの豊かさをこれからも広げていきます。



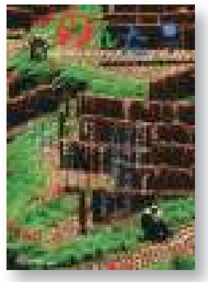


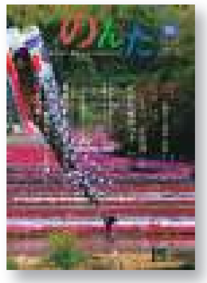


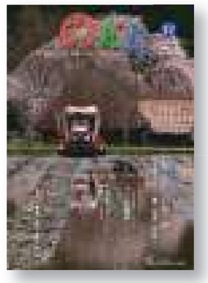
運営委員　**坪郷 英彦**

山口大学名誉教授

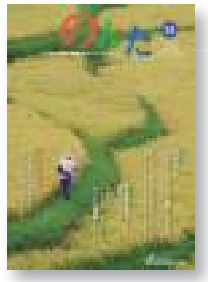
新しい基本法が制定され、生産の立場からだけでなく多面的な農業像を示したことは目からうろこが落ちるようでした。民俗技術などの民俗学的立場で色々話ができたことをうれしく思います。人口減の今日ですが、子どもたちが描く絵や写真にこれからの農業の方向を読み取りましょう。

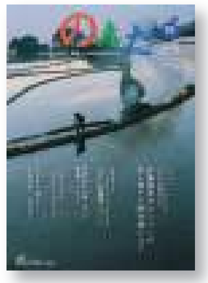






2015

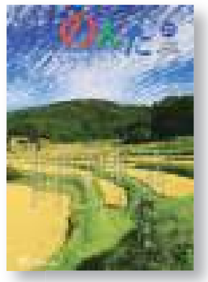


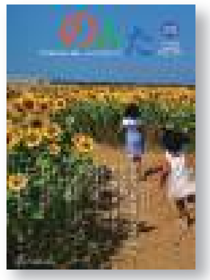


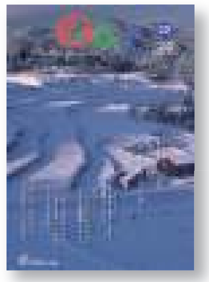
運営委員　**宮本 邦彦**

元 山口新聞編集局長

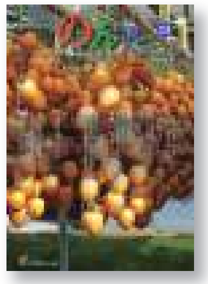
長年、運営委員を務めたお陰で、山口県の農業・農山村の多面的機能やあるべき姿に関心を持つことができました。食料・環境・ふるさと写真コンテストは入賞作品を第1回から山口新聞紙上で紹介するなど、県地球人会議の目的達成に少しは寄与できたと思っています。26年間、ありがとうございました。

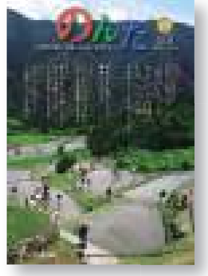




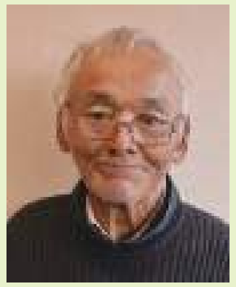


2020





2024



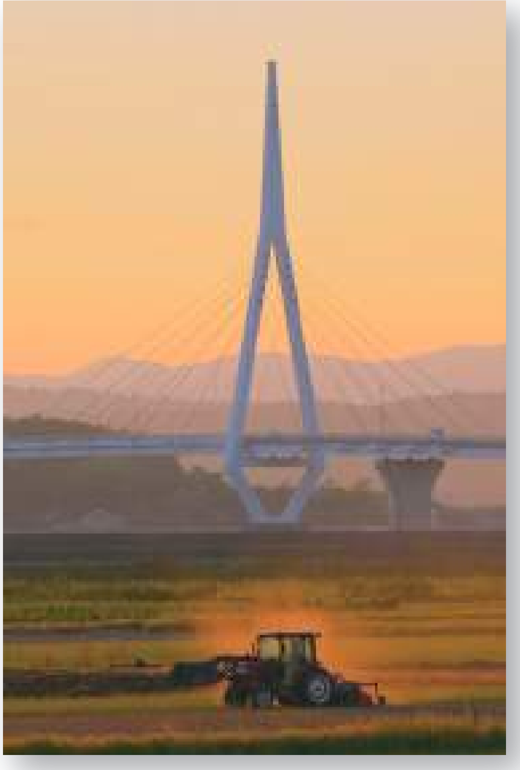
運営委員　**山本 周作**

デザイナー

坂本多旦。この男の無茶ブリに応えていたら、0円リゾート・東京農場・1×2×3＝6他、農業農村を面白がっていました。

会議参加は面白の流れ。田園空間博物館構想の頃。あるフットパス試走報告の冒頭「あいにくの雨」。これに「なぜ雨も楽しまない」。類似の発言多く、後悔も沢山、でした。

Final
最終号
Issue



【26年間ありがとうございました！】

山口県地球人会議は26年間の活動を経て、この度解散することとなりました。山口県地球人会議とともにあった『のんた』も今号が最終号となります。
山口県地球人会議の規約には次のように記載があります。

> 山口県の農業･農村は、食料や木材の生産のほか、国土や環境の保全を通じて今日の経済発展の基を築くと共に、ふるさとである地域の伝統文化を育んできた。
> 私たちの食料を確保し環境を守るためには、可能な限り自国の食料を自国で賄うと共に森林や農地、それを育む「水」と「土」を保全し、農業･農村の多様な役割を将来にわたって維持・創造していくことが必要である。
> このため、山口県のふるさととしての農山村を維持・創造するために農山村の関係者のみならず、広く県民が農業・農村の大切な役割を理解し共に支えあっていくことを目的とする。

この目的を達成すべく、写真コンテストを含めて様々な活動を行ってきました。その活動の中で、沢山の出会いがありました。
ご協力いただいた皆様、ご愛読くださった皆様に、心より感謝申し上げます。

発行

食料･環境･ふるさとを考える
山口県地球人会議　事務局

〒753-0079 山口県山口市糸米二丁目13番35号 水土里ネット山口 山口県土地改良事業団体連合会内
TEL：083-933-0033　FAX：083-933-0048　URL:https://www.yamadoren.or.jp/

印刷インキは、環境にやさしい植物性油インキを使用しています。　令和7年発行　印刷：株式会社コア